授業のヒント

このコーナーでは、初・中級の日本語を教えるときに使えるアイデアを紹介します。今回は漢字の勉強を楽しくする教室活動を二つ選びました。

■**その**Ⅰ■

(なまえ) ぜんぶおぼえた!

もくてき おし 目的・教えること

漢字をひとつひとつ覚えるのではなく、単語 として貰え、使うための練習。

がくしゅうしゃ 学習者のタイプ

漢字を筆語といっしょに学習するクラスで徒う。たとえば、『旨本語初歩』という教科書では、10課で「国」という漢字を「くに」ということばで学習するが、もう一度11課で「外国」という筆語が出てきたときに普読みの「コク」を習う。このように、漢字を筆語として覚えるクラスで使う。

クラスの大きさ

3人以上。学習者が多いときは、3、4人の いたがループに分けることができる。

進備するもの

黒板にはったときに、学習者によく見える大きさのカードを6~10枚くらい。

ぼう **方** 法

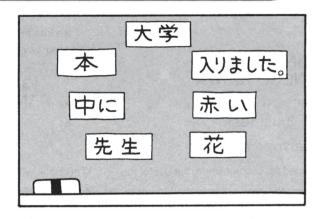
じゅんび

*先生はこれまでに学習した漢字のことばをいくつか選んでそのことばを一つずつカードに書きます。 先生はそのことばを使ったモデルの文を考えておきます。 例:『旨本語初歩』の10課まで勉強した場合は10課までの漢字を使ってモデルの文を考えます。

- *わたしはきょねん大学に入りました。
- *赤い花をかいました。
- *<u>先生</u>のかばんの<u>中に</u><u>本</u>があります。 モデル交の中に漢字のことばが生つあります。これ らの漢字のことばをカードに書きます。

教室で

(1)漢字を書いたカードを全部黒板にはります。 1 回に 10粒くらいまでにしてください。



- (2)学習者に30秒くらいカードを見せます。学習者は30秒でそのことばを覚えます。そのとき、縦に書いてはいけません。学習者が覚えたらカードをしまってください。
- ※一回に見せるカードの数と時間は学習者のレベルによって変えてください。
- (3)学習者は覚えていることばをなるべくたくさん使い、 文を作って、書きます。
- (4)学習者は作った文を発表し、先生の作ったモデルの文とくらべます。
- ※学習者の作った交が先生の交と簡じでなくても、意味のわかる交ならかまいません。

おう **応** 用

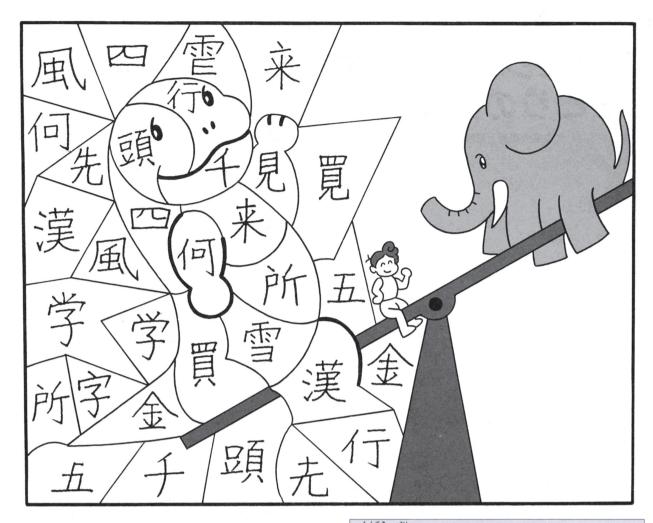
^{おうよう} 応用:1

議解の準備練習になります。短い文章の中に出てくるキーワードを選びます(漢字を使わない単語でもできます)。そのキーワードからモデルの文章がどんな内容か、想像して文章を作ります。

おうよう 応用: 2

グループで学習することもできます。まず3、4人のグループを作ります。たとえば、竺つのグループ(グループAとグループB)を作ります。グループAは漢字を確った箪語をいくつか使って話を作ります。そして、その漢字を使った箪語をカードに書いてグループBに見せます。グループBはグループAの作った話を観像して文を作ります。作りおわったら、書いた文を見せあって、くらべます。

※A、Bのグループが同時にそれぞれ話を作って、ゲームを始めることもできます。



■その2■

(なまえ) ぞうよりおもい?

えをみてください。こどもはぞうよりおもいですか。 ただしいかんじのところにいろをぬってください。わ かります。

方 法

漢字を書くときには、字の彩の小さいところも大切です。 ごしい形を覚えたかどうか、ゲームで確かめてみましょう。

絵に書いてある漢字の節には、変な字があります。 逆しい字とまちがっている字を見つけて、逆しい字が 書いてあるところに色をぬってください。 至蔀逆しく ぬると、絵の節でなぜこどものほうが輩いのかわかり ます。 (答えは22ページ)

このゲームは覚えた漢字の影をチェックするためになってください。新しい漢字を教えるときには使わな

目的・教えること

漢字の正しい形に注意させる。

がくしゅうしゃ 学習者のタイプ

こども

クラスの大きさ

で 付人でもできる。

進備するもの

えた。 上の絵のコピーを1人1まい

いほうがいいでしょう。

おう **応** 用

たの節の学は授業にあわせて変えてください。教えている時に、でてきた漢字のまちがいを使うと効果があると思います。また、絵を変えれば、高校生にも使えるでしょう。



今回のアイデアはどうでしたか。漢字をおぼえるのはちょっとたいくつなので、先生方はいろいろな教え方を使って授業をしていると思います。みなさんもおもしろいアイデアやもっと楽しいゲームを知っていたら、どうぞわたしたちに教えてください。お手紙をまっています。担当:荒川みどり、笠原ゆう子、 浜田麻里(白米語国際センター白米語教育質問員)

Kata and Japanese Culture

analogy for this sort of *kata* is the pottery mold (*igata*). With a pottery mold one can, at any time, recreate an identical copy of the original "work" of art. If one, after long years of practice, is able to master a beautiful *kata*, one can then, at any time, recreate a beautiful *katachi*. However, this is only possible if the spiritual and physical condition of the "performer" is exactly the same when each "performance" is undertaken.

In this case, how do *kata* and *katachi* differ? I like to call *kata* which has thus been mastered "*kata* as form." This, of course, is closely related to *katachi*, but it is something that transcends mere structure (*katachi*). In this sense, it is similar to the Greek word *idea* or *eidos*, but whereas these terms are thought to represent a reality which transcends structure, *kata* only reveals itself in its concrete form of structured action (*katachi*). Transcendence, as far as *kata* is concerned, is a transcendence which demands a unity of outer and inner worlds, of the transcendent and the corporeal.

The influence of the world beyond our sense perception and the material world of our senses can be seen in both. *Kata* contains aspects both of Greek metaphysics which places ultimate value in the transcendent and a sort of metaphysics different from the Greeks in which there is no distinction between this world and the other and in which transcendence can occur in this material world.

When Japanese people first became conscious of this "kata as form," kata was still in its formative or primitive stage. Words connected with the phenomenon of kata in this early period included terms such as katagi (wooden form), katazome (stencil), igata (pottery mold), etc. All of them were clearly related to the idea of "kata as form."

The beauty seen in this "kata as form," which had developed

over a long period of trial and error, came to be treasured by the Japanese people. Beginning with the art of flower arrangement (*kadō*), which demands the proper arrangement of "heaven," "earth," and "humanity," one can see evidence of a basic *kata* which covers the entire cosmos, but which in this case has been condensed into a miniature cosmos of its own.

Moreover, in order to realize the beauty of *kata* of this sort, we are forced to forget ourselves and enter into a state of mindlessness (mushin) in which all things proceed effortlessly according to nature. And in order to place oneself into this state of mindlessness it is necessary to train one's body and mind for over a long period. The process of such training has come to be known as "the way" ($michi/d\bar{o}$), which contains within itself a certain religiosity.

Of course, one cannot do without innate talent and physical training. But on the other hand, these qualities are insufficient. Ultimately, *kata* involves the cultivation of the heart/mind (*kokoro*). It is not enough to simply perfect one's skill in a certain area. An episode relating to Yamaoka Tesshū, the famous swordsman, is instructive. After years of training in swordsmanship, Tesshū felt he could advance no further. He took up Zen and practiced meditation for fourteen years before achieving a certain enlightenment; it was only then that he was able to make any progress with his swordsmanship.

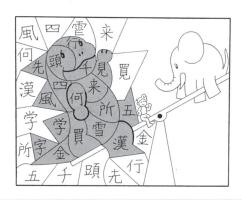
A unity of "heart/mind" (shin/kokoro), "talent" (gi/waza), and "body" (tai/karada) is demanded at the last stage of the cultivation of kata. In Japan, the beauty of kata is thought to involve that initial actualization of the change from a state of existence in which spirit and body are divided into one in which they are united. The world of the arts in Japan, including the martial arts, demands this sort of deep spirituality.

The Japan Foundation Newsletter のご案内

国際交流基金では、日本研究の動向や現代日本文化を紹介することを目的とした英文の機関誌「The Japan Foundation Newsletter」を隔月で発行しています。「日本語教育通信」が日本語教育に携わる人のための専門誌であるのに対し、こちらのNewsletterは日本研究者のための専門誌です。日本研究の諸分野についてのエッセイや論文の他に、日本の主要新聞各紙から日本文化について書かれた記事を抜粋し英訳して紹介するコーナーや、日本国内外で発行される日本研究図書の書評欄、紹介欄などもあり、日本語教師に

も役立つ情報が掲載されています。

購読希望者は個人、団体を問わず、下記の申し込み先に直接手紙かFAXでお申し込みください。購読料、送料とも無料です。ただし、部数に限りがありますので、機関ごとに申し込む方が入手しやす



くなります。

▶申し込み先

国際交流基金編集課

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3-6 パークビル 3 F

TEL 03-3263-4505

←13ページの答え

